

三浦あけ

本書は、文部省科学研究費補助金（特別推進研究（1）の助成を受けて行われた）1995年SSM（社会階層と社会移動）調査の研究成果報告書「1995年SSM調査シリーズ」（全21巻）のうちの一冊である。

SSM調査は1955年に第1回の全国調査が始められて以来、日本社会の階層構造とその変動を実証的に研究することを目的として10年ごとに実施され、これまで40年以上にわたって続いている。

職業評価の構造と職業威信スコア

Occupational Evaluations and Prestige Scores

本研究は、これらを通じて日本社会の階層と不平等を分析し、さらに階層構造と職業の相関が近代社会における階層および職業の変動とその意味を理論的に探究することをめざした。具体的には、次の7つの探求課題を設定した。

- (1) 階層の国際比較と日本の社会構造
- (2) 社会移動の実態および趨勢
- (3) 教育と社会階層
- (4) 階層意識の構造および趨勢
- (5) 女性の地位・キャリアと社会意識
- (6) ライフスタイルと階層
- (7) 階層の理論的再定式化

都築一治 編

本研究は、1993年に「95年SSM調査準備委員会」を設立して研究計画の策定にとりかかり、1994年に科学研究費補助金の交付決定を受けて「1995年SSM調査研究会」を組織し、140名近い研究者の協力をえて22の個別研究班に分かれて研究テーマの具体化と調査票の作成および調査の準備を進めた。

1995年SSM調査は、共通の基本部分を含む3種類の調査票（A票、B票、およびP（威信）票）を作成し、70歳未満の全国の男女の有権者を母集団とする層別3段抽出により、無作為に抽出した全国336地点の対象者に1995年10月下旬から11月下旬にかけて個別面接調査によって実施した。（うち79地点は本研究会による直接管理により、残り257地点は社団法人 中央調査社に委託。）設計標本数と有効回収数は以下の通りであった。（詳しくは「1995年SSM調査コード・ブック」を参照されたい。）

	標本数		有効回収数			有効回収率			
	男	女	男	女	計	男	女	計	
A票	2,016	2,016	4,032	1,248	1,405	2,653	61.9	69.7	65.8
B票	2,016	2,016	4,032	1,242	1,462	2,704	61.6	72.5	67.1
威信票	837	838	1,675	566	648	1,214	67.5	77.3	72.5
全体	4,869	4,870	9,739	3,656	4,115	7,771	67.5	72.2	69.8

科学研究費補助金 特別推進研究（1）

「現代日本の社会階層に関する全国調査研究」成果報告書

職業階層の価値評価と職業生活

Occupational Evaluations and Prestige Scores

職業階層

(1) 調査報告書 金沢大学経済学研究所
報告書第1号「昭和45年度全国労働力調査の分析」

刊行のことば

本書は、文部省科学研究費補助金（特別推進研究(1)）の助成をえて行われた1995年SSM（社会階層と社会移動）調査の研究成果報告書『1995年SSM調査シリーズ』（全21巻）のうちの一冊である。

SSM調査は1955年に第1回の全国調査が始められて以来、日本社会の階層構造とその変動を実証的に研究することを目的として10年ごとに実施され、これまで40年以上にわたって日本の戦後の大規模な社会変革と日本経済の急激な産業化に伴う社会構造および階層構造の変動に関する研究を担ってきた。第5回にあたる1995年SSM調査研究は、これまでの研究の蓄積を踏まえつつ、新たなデータに基づいて現代日本社会の階層と不平等を分析し、さらに冷戦構造終焉後の観点から近代社会における階層および階級の変動とその意味を理論的に探究することをめざした。具体的には、次の7つの探求課題を設定した。

- (1) 階層の国際比較と日本の社会構造
- (2) 社会移動の実態および趨勢
- (3) 教育と社会階層
- (4) 階層意識の構造および趨勢
- (5) 女性の地位・キャリアと社会意識
- (6) ライフスタイルと階層
- (7) 階層の理論的再定式化

本研究は、1993年に「95年SSM調査準備委員会」を設立して研究計画の策定にとりかかり、1994年に科学研究費補助金の交付決定を受けて「1995年SSM調査研究会」を組織し、140名近い研究者の協力をえて22の個別研究班に分かれて研究テーマの具体化と調査票の作成および実査の準備を進めた。

1995年SSM調査は、共通の基本部分を含む3種類の調査票（A票、B票、およびP（威信）票）を作成し、70歳未満の全国の男女の有権者を母集団とする層別3段抽出により、無作為に抽出した全国336地点の対象者に1995年10月下旬から11月下旬にかけて個別面接調査によって実施した。（うち79地点は本研究会による直接管理により、残り257地点は社団法人 中央調査社に委託。）設計標本数と有効回収数は以下の通りであった。（詳しくは『1995年SSM調査コード・ブック』を参照されたい。）

	標本数			有効回収数			有効回収率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
A票	2,016	2,016	4,032	1,248	1,405	2,653	61.9	69.7	65.8
B票	2,016	2,016	4,032	1,242	1,462	2,704	61.6	72.5	67.1
威信票	837	838	1,675	566	648	1,214	67.6	77.3	72.5
全体	4,869	4,870	9,739	3,056	3,515	6,571	62.8	72.2	67.5

その後ただちにコーディングとデータ・クリーニングとを集中的に実施し、1996年7月から研究体制を再組織して1955年以降の5時点のSSM調査データを中心とする分析と研究を進め、このたびここに『1995年SSM調査シリーズ』と題する研究成果報告書を刊行するに至ったものである。

本研究の推進に当たっては、研究協力者の他に多数の方々からのご指導とご支援をいただいた。記して深く感謝申し上げたい。

次の先生方からは、懇切なご指導とご鞭撻をいただいた。(順不同、敬称略)

- 新 睦 人 (奈良女子大学)
- 菊 池 城 司 (大阪大学)
- 田 中 義 久 (法政大学)
- 富 永 健 一 (慶応大学〔当時〕)
- 直 井 優 (武蔵大学)
- 森 岡 清 美 (淑徳大学)
- 綿 貫 譲 治 (上智大学)

次の先生方からは、実査にあたりご協力いただいた。(順不同、敬称略)

- 佐 藤 三 三 (弘前大学)
- 横 井 修 一 (岩手大学)
- 松 岡 昌 則 (秋田大学)
- 北 村 寧 (福島大学)
- 村 山 研 一 (信州大学)

このたびの報告書の刊行をもって、1995年SSM調査研究はひとつの区切りをつけることになるが、これはまだ研究の一ステップにすぎない。当初設定した研究課題の探求は形を変えてまだまだ継続していく予定であり、これからもいっそうのご叱正と励ましとを賜うことができれば幸いである。

1998年3月

1995年SSM調査研究会

平均回帰係			標準回帰係			標準誤差		
性	文	農	性	文	農	性	文	農
8.28	7.88	8.18	0.28	0.18	0.18	0.28	0.18	0.18
1.78	2.58	1.48	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18
2.58	2.78	2.78	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18
2.78	2.58	2.58	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18

付記1. 本研究会による刊行物のリスト

『SSM産業分類・職業分類(95年版)』1995年12月

『1995年SSM調査 コード・ブック』1996年12月

『1995年SSM調査 基礎集計表』1997年3月

1995年SSM調査シリーズ(研究成果報告書集)(1998年3月刊)

- 第1巻 石田 浩 編 『社会階層・移動の基礎分析と国際比較』
- 第2巻 佐藤 俊樹 編 『近代日本の移動と階層:1896-1995』
- 第3巻 佐藤 嘉倫 編 『社会移動とキャリア分析』
- 第4巻 三隅 一人 編 『社会階層の地域的構造』
- 第5巻 都築 一治 編 『職業評価の構造と職業威信スコア』
- 第6巻 間々田 孝夫 編 『現代日本の階層意識』
- 第7巻 片瀬 一男 編 『政治意識の現在』
- 第8巻 宮野 勝 編 『公平感と社会階層』
- 第9巻 岩本 健良 編 『教育機会の構造』
- 第10巻 近藤 博之 編 『教育と世代間移動』
- 第11巻 苅谷 剛彦 編 『教育と職業——構造と意識の分析』
- 第12巻 盛山 和夫 編 『女性のキャリア構造とその変化』
- 第13巻 岩井 八郎 編 『ジェンダーとライフコース』
- 第14巻 尾嶋 史章 編 『ジェンダーと階層意識』
- 第15巻 渡辺 秀樹 編 『階層と結婚・家族』
- 第16巻 志田 基与師 編 『豊かさと格差』
- 第17巻 鹿又 伸夫 編 『社会階層とライフスタイル』
- 第18巻 白倉 幸男 編 『文化と社会階層』
- 第19巻 片岡 栄美 編 『東アジアの階層比較』
- 第20巻 園田 茂人 編 『社会階層の新次元を求めて』
- 第21巻 与謝野 有紀 編 『産業化と階層変動』

付記2. 文部省科学研究費補助金研究組織等

研究課題「現代日本の社会階層に関する全国調査研究」(06101001)

研究種目 特別推進研究(1)

研究組織

- 研究代表者：盛山和夫（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- 研究分担者：原 純輔（東北大学文学部教授）
- 研究分担者：高坂健次（関西学院大学社会学部教授）
- 研究分担者：海野道郎（東北大学文学部教授）
- 研究分担者：今田高俊（東京工業大学大学院社会理工学研究科教授）
- 研究分担者：白倉幸男（大阪大学人間科学部教授）
- 研究分担者：近藤博之（大阪大学人間科学部教授）

（研究協力者については、全リストを第21巻に掲載した。）

研究経費

平成6年度	19,000 千円
平成7年度	60,000 千円
平成8年度	23,000 千円
平成9年度	19,000 千円
計	121,000 千円

研究発表

全リストを第21巻に掲載。

はしがき

1995年SSM全国調査では、社会階層と社会移動に関する調査に並行して、20年ぶりに職業の社会的評価に関する調査が行われた。さらにその20年前の1955年SSM調査においても同様の調査が行なわれており、20年間隔で継続的に職業そのものに関する調査が行なわれてきたことになる。

これら調査の目的は、階層的地位の中心的位置を占めると考えられてきた職業的地位を、人々がどのように捉えているかを明らかにすることにある。社会全体の階層的な構造を分析しようとするなかで、職業がその中心的位置を占めるということは、とりもなおさず、われわれの分析枠組みの中に職業的地位の階層的序列が仮定されていることを意味している。その獲得機会の開放性や獲得過程における不平等の問題を分析しようとするのが、社会階層研究なのである。

95年の職業に関する調査も、人々の認知枠組みの中にあると考えられる職業序列に関するデータを収集し分析することを目的としている。しかしながら、ここで明確にし、強調しておかなければならないことは、調査によって引き出された職業評価は、職業に関する差別的な意見の表明ではないと、われわれは捉えているということである。それはむしろ現代社会の構造的な特性なのであり、この社会に組み込まれた職業序列を生む仕組みを解明することがわれわれに課されている。

今回の調査票の設計にあたっては、前回調査やプリテストの結果を考慮して慎重に検討して前回調査票からいくつかの変更点を行なった。まず、調査対象職業名を82から56に絞ったこと、また、20年の月日の経過を考慮して、イメージの喚起しにくい職業名を変更したり、複合的で混乱しやすいイメージの職業名を単純化するなどの配慮を行なった。さらに、調査対象者を男性だけでなく女性にも広げ、より広範な情報を収集することに努めている。しかし、こうした変更によって、前回調査との比較可能性がやや損なわれているのも事実である。とくに対象職業数は前回調査を大きく下回っており、継続調査としては問題が残るかもしれない。

本巻は「1995年SSM調査シリーズ」の第5巻にあたり、上記調査データを対象に、職業の評価およびその集計値である職業威信スコア(Occupational Prestige Score)を分析することを主な目的としている。ここには全部で11の論文が収められており、これらはこの2年余の研究會活動の成果でもある。

研究班の運営にあたっては、この目的のもとに個々のメンバーに自由にテーマを設定してもらい、それぞれ個別に研究を進め、それを研究會で報告・討議するという方針でのぞんだ。巻末の「既発表成果一覧」にもあるように、中間段階で個別に学会大会などでも報告を行なっており、本報告書はひとまずの終着点ではある。

職業威信スコアの問題点と新スコアの提案

— 従業先規模が職業評価に及ぼす影響を中心に —

村瀬 洋一
(立教大学社会学部)

A Proposal of the New Occupational Prestige Score:
The Effect of the Scale of Company on the Evaluation of Occupation

Yoichi Murase

How should be social status measured? The scale of company has large effect on its employee's social status in Japanese society. This paper constructs the new prestige score which is adjusted by scale of company. Analyzing the stratification process model by using the new score, variance explained by the model is remarkably improved. The new score reflects the importance of company scale to Japanese people's life and social status.

キーワード：新職業威信スコア、従業先規模、社会的地位の測定

1. 問題の所在と本論の目的

1.1. 従業先規模が職業評価に及ぼす影響

社会的地位とは、どのようにして測定するのが適切なのだろうか。直井・鈴木(1977)などを中心に、1975年SSM調査委員会によって作成された職業威信スコア(以下スコア75と略)は、1975年SSM調査の結果を基に作られたものである。これは、289個の職業小分類項目ごとにスコアが決まっており、同じ職業ならば、大企業の所属であろうと中小企業勤務であろうとスコアは同じである。

このようなスコアが日本における社会的地位を的確に表しているだろうか。日本社会において、勤務先が大企業かそうでないかによって、他者から受ける信用や評価、現実の生活水準などに大きな格差があるのは広く知られた事実である。多くの社会学研究において、社会的地位の総合的指標として職業が用いられ、個々人の仕事の内容を基準に職業威信スコアが作られてきた。しかし、現実の日本社会においては、仕事の内容のみでなく、所属企業によって、人々の社会的地位が評価されているという事実が存在する。職業威信スコアが、人々が他者から受ける社会的評価を正確に反映すべきものであるならば、仕事内容のみにもとづいて社会的地位の指標を作るのは不適切であろう。

1975年の調査においては、82の職業名を提示して調査対象者に評定を行ってもらったが、うち3組6つの職業名に従業先規模が入っている。いずれも大企業の方が中小企業よりも

表1 職業威信スコア 標準偏差順 1995年威信票男性 566人

職業名	スコア	標準偏差	Kurtosis	Skewness	最小値	最大値	有効 回答数
Q341 国会議員	74.9	23.6	0.80	-0.92	0	100	547
Q324 高級官僚	77.5	22.2	0.85	-0.93	0	100	548
Q327 プロスポーツ選手	68.9	21.6	-0.17	-0.20	0	100	544
Q314 炭坑夫	36.3	19.4	0.07	-0.14	0	100	538
Q342 道路工夫	37.6	18.6	0.28	-0.43	0	100	546
Q338 寺の住職	60.1	18.6	0.74	-0.21	0	100	543
Q335 パイロット	82.3	18.4	-0.02	-0.71	0	100	551
Q315 大学教授	83.4	18.0	0.25	-0.81	0	100	550
Q329 農業	45.4	17.9	1.95	-0.23	0	100	546
Q332 裁判官	86.7	17.3	0.35	-1.06	25	100	551
Q309 スチュワーデス	68.2	17.2	-0.38	0.05	25	100	549
Q301 大会社の社長	87.3	16.9	-0.04	-1.02	25	100	549
Q334 守衛	38.9	16.7	0.41	-0.55	0	100	550
Q356 音楽家	67.1	16.7	-0.35	0.09	25	100	545
Q316 漁業者(漁師)	46.6	16.7	1.96	-0.06	0	100	546
Q325 小学校の教諭(先生)	63.8	16.3	-0.01	0.10	0	100	551
Q311 看護婦	57.8	16.3	0.59	0.29	0	100	551
Q350 公認会計士	71.7	16.3	-0.49	0.06	25	100	546
Q310 建築士	72.1	16.3	-0.47	0.04	25	100	551
Q308 中小企業の経営者	69.0	16.1	0.79	-0.33	0	100	550
Q307 医師	88.5	15.9	0.30	-1.10	25	100	550
Q304 大工	52.7	15.8	1.26	0.30	0	100	552
Q305 ウェイトレス	37.3	15.7	-0.01	-0.54	0	100	548
Q353 自動車設計技術者	66.7	15.7	-0.62	0.34	25	100	551
Q331 紡績工	41.4	15.6	1.40	-0.78	0	100	546
Q321 服飾デザイナー	63.5	15.3	-0.40	0.28	25	100	546
Q328 中小企業の機械組立工	46.1	15.0	2.20	0.02	0	100	548
Q306 大会社の営業担当社員	57.2	14.5	0.65	0.15	0	100	551
Q336 商店の店員	41.9	14.4	1.46	-1.21	0	100	551
Q352 薬剤師	64.6	14.4	-0.69	0.24	25	100	549
Q347 大会社の課長	63.2	14.4	-0.20	0.12	0	100	550
Q344 家具職人	51.6	14.3	2.97	0.30	0	100	548
Q312 大企業の機械組立工	49.3	14.3	1.79	0.35	0	100	550
Q345 保険の勧誘員	43.5	14.3	2.08	-1.19	0	100	545
Q355 食品かんづめ工	42.2	14.3	1.58	-0.90	0	100	546
Q330 印刷工	43.6	14.2	2.30	-0.56	0	100	550
Q322 警察官	55.9	14.2	0.98	0.69	25	100	552
Q303 レストランのコック	50.7	13.9	2.47	0.26	0	100	550
Q320 土木・建築の現場監督	56.2	13.6	0.40	0.48	25	100	549
Q337 バン製造工	44.2	13.4	2.35	-0.90	0	100	551
Q302 電気工事人	49.9	13.4	2.65	0.57	25	100	550
Q323 中小企業の課長	55.5	13.3	1.69	0.50	0	100	550
Q343 市役所の課長	57.0	13.2	0.74	0.24	0	100	551
Q339 銀行員	56.5	12.9	0.98	0.66	0	100	551
Q319 保母	52.0	12.8	3.21	0.29	0	100	551
Q313 自動車セールスマン	46.5	12.8	3.81	-0.71	0	100	550
Q318 郵便配達人	45.5	12.6	4.54	-0.89	0	100	549
Q333 バス運転手	48.4	12.5	5.05	-0.30	0	100	551
Q346 自動車修理工	46.6	12.3	3.66	-0.29	0	100	551
Q351 卸売店主	53.8	11.9	3.62	0.52	0	100	550
Q326 理容師(理髪師)	49.5	11.7	4.80	0.25	0	100	549
Q317 鉄道の駅員	47.3	11.4	4.98	-0.87	0	100	550
Q340 小売店主	51.5	11.4	3.86	0.00	0	100	549
Q348 電車運転士	50.7	11.3	5.59	0.48	0	100	551
Q349 中小企業の事務員	46.0	10.9	4.78	-1.60	0	100	550
Q354 銀行の窓口係	48.8	10.1	7.82	-0.71	0	100	551

注 Kurtosis 尖度 分布の広がり(裾野)の測度。正だと、正規分布と比べ、中心点にケースが集中。
Skewness 歪度 分布の非対称性の測度。正だと、平均より大きい側に極値が多く存在。
従業先規模の情報を含む職業名に網掛けをした。

スコアの平均値 56.4

標準偏差の平均値 15.2

表2 職業威信スコア 標準偏差順 1995年威信票女性 648人

職業名	スコア	標準偏差	Kurtosis	Skewness	最小値	最大値	有効 回答数
Q341 国会議員	74.9	21.9	0.70	-0.78	0	100	623
Q324 高級官僚	77.4	20.2	0.00	-0.57	0	100	615
Q314 炭坑夫	37.0	18.6	0.18	-0.19	0	100	609
Q327 プロスポーツ選手	69.0	18.0	-0.71	0.19	25	100	622
Q338 寺の住職	60.5	17.9	0.63	-0.01	0	100	612
Q311 看護婦	61.5	17.5	0.58	0.07	0	100	633
Q335 パイロット	82.6	17.4	-0.46	-0.58	25	100	625
Q329 農業	45.8	17.3	2.13	-0.11	0	100	623
Q309 スチュワーデス	71.6	17.1	-0.37	0.03	0	100	626
Q332 裁判官	87.1	16.6	-0.11	-0.96	25	100	624
Q301 大会社の社長	87.3	16.6	1.31	-1.18	0	100	632
Q342 道路工夫	40.2	16.6	0.83	-0.37	0	100	619
Q315 大学教授	85.1	16.3	-0.21	-0.71	25	100	628
Q310 建築士	71.8	16.2	-0.65	0.13	50	100	630
Q322 警察官	59.7	16.0	0.93	0.68	0	100	629
Q350 公認会計士	70.1	16.0	0.15	-0.10	0	100	621
Q352 薬剤師	66.7	15.7	0.70	-0.19	0	100	626
Q316 漁業者(漁師)	46.5	15.7	1.84	-0.04	0	100	622
Q353 自動車設計技術者	66.0	15.7	-0.16	0.17	0	100	623
Q308 中小企業の経営者	68.9	15.6	0.44	-0.25	0	100	627
Q334 守衛	40.8	15.5	0.81	-0.65	0	100	618
Q356 音楽家	66.2	15.4	-0.46	0.18	25	100	611
Q321 服飾デザイナー	65.5	15.3	-0.49	0.22	25	100	617
Q305 ウェイトレス	38.8	15.2	-0.09	-0.72	0	75	630
Q325 小学校の教諭(先生)	63.4	15.0	-0.11	0.07	0	100	631
Q304 大工	53.5	15.0	1.12	0.29	0	100	630
Q347 大会社の課長	63.1	14.8	0.55	-0.24	0	100	626
Q331 紡績工	42.5	14.6	1.31	-0.72	0	100	616
Q312 大企業の機械組立工	52.8	14.2	2.58	0.12	0	100	619
Q328 中小企業の機械組立工	47.2	14.1	3.03	-0.25	0	100	617
Q306 大会社の営業担当社員	57.6	14.0	1.02	-0.05	0	100	620
Q307 医師	91.5	13.8	0.94	-1.38	50	100	632
Q320 土木・建築の現場監督	57.1	13.8	0.63	0.48	0	100	627
Q336 商店の店員	42.9	13.7	1.95	-1.33	0	100	629
Q343 市役所の課長	56.8	13.5	1.81	0.35	0	100	629
Q345 保険の勧誘員	45.0	13.4	2.77	-0.76	0	100	616
Q330 印刷工	44.4	13.3	2.29	-0.86	0	100	619
Q355 食品かんづめ工	42.2	13.3	1.01	-0.96	0	100	617
Q319 保母	53.8	13.1	2.54	0.24	0	100	630
Q337 バン製造工	45.0	13.0	3.14	-1.09	0	100	624
Q339 銀行員	56.3	12.9	2.17	0.97	0	100	627
Q302 電気工事人	50.9	12.8	3.80	0.42	0	100	627
Q344 家具職人	52.5	12.7	2.39	0.16	0	100	624
Q303 レストランのコック	52.5	12.6	3.44	0.26	0	100	622
Q323 中小企業の課長	56.6	12.6	1.36	-0.67	0	100	623
Q346 自動車修理工	47.0	11.5	4.14	-1.04	0	100	626
Q318 郵便配達人	46.9	11.4	5.73	-1.29	0	100	630
Q326 理容師(理髪師)	49.8	11.2	4.84	-0.24	0	100	626
Q313 自動車セールスマン	47.9	11.1	4.47	-0.82	0	100	631
Q340 小売店主	51.1	11.1	5.15	-0.01	0	100	627
Q317 鉄道の駅員	48.3	10.6	6.90	-0.67	0	100	628
Q333 バス運転手	49.4	10.6	6.16	-0.15	0	100	628
Q351 卸売店主	52.0	10.4	5.07	0.55	0	100	624
Q349 中小企業の事務員	47.8	10.2	8.14	-1.35	0	100	625
Q348 電車運転士	51.9	10.2	6.57	1.13	0	100	623
Q354 銀行の窓口係	49.9	9.9	11.32	-0.34	0	100	627

注 Kurtosis 尖度 分布の広がり(裾野)の測度。正だと、正規分布と比べ、中心点にケースが集中。
Skewness 歪度 分布の非対称性の測度。正だと、平均より大きい側に極値が多く存在。
従業先規模の情報を含む職業名に網掛けをした。

スコアの平均値 57.3

標準偏差の平均値 14.4

表1、2は、1995年調査で評定してもらった56の職業名の、スコアや標準偏差に関する表である。職業名は、標準偏差（回答のばらつき）の大きさ順に並べてある。男女とも、中小企業の方が回答のばらつきが少ない傾向がある。とくに、中小企業の課長、事務員は、標準偏差が小さめである。社長や経営者は、比較的、標準偏差が大きく、企業規模を限定したからといってばらつきが少なくなると結論づけることは難しい。1975年についての同様の表が直井(1979:446)に掲載されている。1995年における52職業のスコアの平均値は56.4なのに対し、1975年における全職業のスコアの平均値は50.4点で、1995年の方が6点上がっている。しかし、75年の全体の標準偏差は15.7点で、95年とさほど変わらない。尖度や歪度を見ると、分布の形が正規分布に近いかが分かる。男性回答者で尖度が大きいのは、銀行の窓口係、電車運転士、バス運転手、鉄道の駅員など、威信スコアが比較的低い職業であり、標準偏差は小さめのものが多い。回答のばらつきは小さく、回答はの分布は中心付近に集中しているようだ。歪度を見ると、絶対値が1以上のものはすべて負の値を取っている。絶対値が大きいものは、中小企業の事務員、商店の店員、保険の勧誘員などの、比較的威信の低い職業と、医師、裁判官、大会社の社長などの威信の高い職業の両者が存在した。

威信の低い職、高い職の両極端のものにおいて、歪みが大きく、正規分布から離れた分布の形をしており、極値は平均値よりも小さい。

女性では、尖度が大きいのは、男性と同様の職のほか、中小企業の事務員も尖りが大きい。歪度が正の値で大きいものは、電車運転手、銀行員などが存在した。負の値で絶対値が大きい職業は、男性と同様、中小企業の事務員や商店の店員などと、医師や大会社の社長などの高威信の職業の両者が存在した。

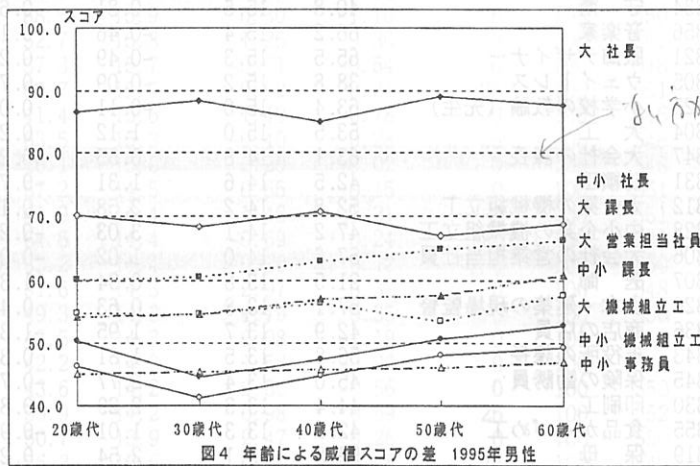


図4 年齢による威信スコアの差 1995年男性

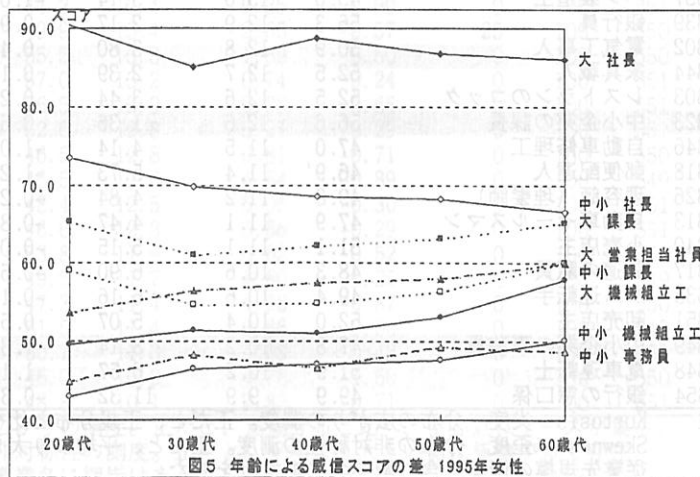


図5 年齢による威信スコアの差 1995年女性

3.2. 回答者属性と職業評価や従業先規模の差の関連

従業先規模による評価の差は、回答者の属性によって変動するかどうかを分析したものが図4以降である。男性における年齢と威信スコアの関連を見ると、社長はあまり明確な関連はないが、その他の職業は、おおむね年齢が高いほど評価も高くなっている。マニュアルワーカーは、どの年齢でも企業規模間の差はほぼ一定だが、30代がもっとも評価が低く、年齢との関連は単調増加ではない。

学歴による効果は、男女とも、ブルーカラーに関しては比較的明確で、学歴が高いほど、ブルーカラーを低く評価している。また、高学歴の男性は、大企業の営業担当社員を低めに評価する、高学歴女性は中小企業社長を高め評価するなど、いくつかの傾向が見られる。しかし、全体的な傾向としては、回答者の属性に関わらず、大企業、中小企業の差は存在するようだ。

男性の回答者職業別の結果が図8である。職業分類は、1995年SSM調査研究会(1995:105)のSSM総合職業分類を簡略化したものを用いた。回答者がブルーカラーやマニュアルワーカーだと、機械組

立工を高く評価するなど、若干の内集団びいき的とも見られる傾向がある。図9が女性についての結果である。女性の管理職は4人しかおらずはずれ値になるので分析から除いた。女性の大企業ホワイトカラーは、社長や事務員に関して企業規模による差が小さい。中小企業ホワイトカラーは、大企業社長を高く評価している。また、農業は大企業勤務者をおおむね高く評価しているなど、いくつかの傾向は見られるものの、さほど一貫した傾向は見られない³⁾。

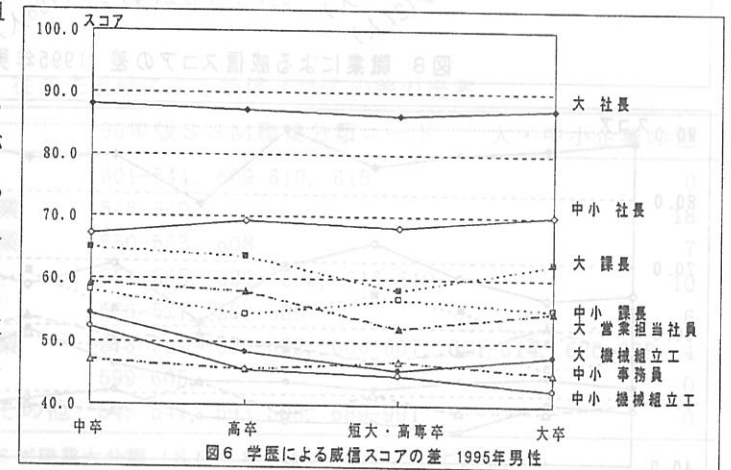


図6 学歴による威信スコアの差 1995年男性

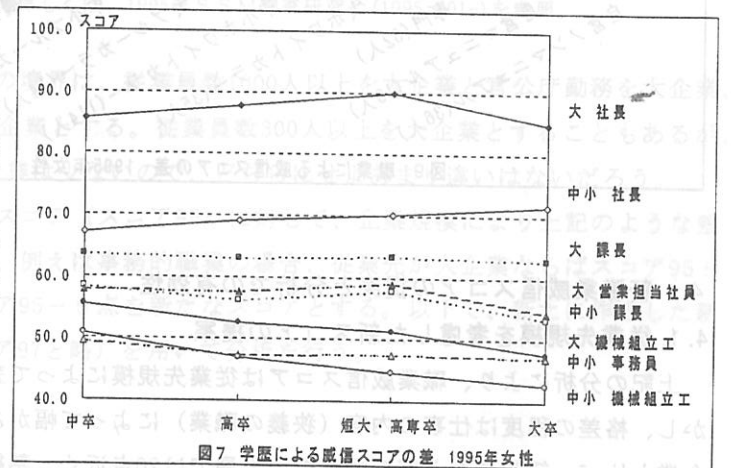


図7 学歴による威信スコアの差 1995年女性

の「個人教師」や「その他の保健医療従事者」と同じスコアでよいのか、など、新しい職業について、今後、職業分類や威信スコアを作る際には、検討することが必要だろう。

注

- 1) 『SSM産業分類・職業分類』は、国勢調査で用いる職業分類を参考に、原純輔を中心とした1995年SSM調査研究会によって作成された。詳しくは、1995年SSM調査研究会(1995)を参照。
- 2) 注目すべきなのは、威信調査については2時点とも回収率が7割を超えることである。SSM本調査と比べ、職業威信調査は、1地点あたりの対象者数が少ない。そのため、調査員の労力が少なく、きめ細かく繰り返し何度も対象者を訪問できることが、回収率の上昇につながっていると考えられる。SSM調査のような、全国を対象とした大規模な社会調査は、調査員の管理が難しく、とくに都市部での回収率が下がることが多い。しかし、1人の調査員の担当する対象者数を減らすか、長期間繰り返し訪問するなど、工夫することによっては、回収率を高めることが可能だろう。
- 3) 欠損値(DK/NAのもの)を除いて分析しているので、図中の職業の人数と分析に用いた人数は必ずしも一致しない。また、管理的職業の者の中に、本人の仕事内容の回答を生かして、職業コードが管理的職業となっていないものがあるので、1995年SSM調査研究会(1996:114)にしたがい、職業コードを変換している。なお、図10から図27のパス解析においては、欠損値には平均値を代入している。
- 4) 説明変数は、多重共線性がでないよう、事前に相関行列を見て投入するものを選んだ。回答の選択肢は、肯定的なものの値が高くなるように、調査票の選択肢の数字とは逆の順序にした。データや質問文について詳しくは、各年度の『基礎集計表』や『コード・ブック』を参照。

引用文献

- Blau, Peter M. and Otis Dudley Duncan. 1967. *The American Occupational Structure*. New York: Wiley.
- Doeringer, Peter B. and Michael J. Piore. 1971. *Internal Labor Markets and Manpower Analysis*.
- Galbraith, J. K. 1967. 3rd ed. 1978. *The New Industrial State*. =都留重人監訳.
1980. 『新しい産業国家』TBSブリタニカ.
- Goldthorpe, John.H., Keith Hope. 1974. *The Social Grading of Occupations: A New Approach and Scale*. Oxford University Press.
- Inkeles, Alex and Peter H. Rossi. 1956. "National comparisons of occupational prestige." *the American Journal of Sociology*. Vol.61:329-339.
- Matsueda, Ross L., Rosemary Gartner, Irving Piliavin, Michael Polakowski, 1992, "The Prestige of Criminal and Conventional Occupations: A Subcultural Model

of Criminal Activity." *American Sociological Review*. Vol.57:752-770.

Nakao, Keiko, Judith Treas, 1994, "Updating Occupational Prestige and Socioeconomic Scores: How the New Measures Measure Up." *Sociological Methodology* Vol.24:1-72.

- 直井優. 1978. 「職業の分類と尺度」. 富永健一編. 『社会階層と社会移動: 1975年SSM全国調査報告』1975年SSM全国調査委員会.
- 直井優. 1979. 「職業的地位尺度の構成」. 富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会.
- 直井優・鈴木達三. 1977. 「職業の社会的評価の分析 - 職業威信スコアの検討」. 『現代社会学』第4巻第2号:115-156.
- 岡本英雄・原純輔. 1978. 「職業の魅力」. 富永健一編. 『社会階層と社会移動: 1975年SSM全国調査報告』1975年SSM全国調査委員会.
- Thielbar, Gerald and Saul D. Feldman. 1969. "Occupational Stereotypes and Prestige." *Social Forces* 48:62-72.
- 都築一治. 1989. 「多次元的職業評価の構造」. 『流通経済大学社会学部開校記念論文集』.
- Wegener, Bernd, 1992, "Concepts and Measurement of Prestige." *Annual Review of Sociology*. Vol. 18:253-280.
- 安田三郎・原純輔. 1982. 『社会調査ハンドブック 第3版』有斐閣.
- 1995年SSM調査研究会. 1995. 『SSM産業分類・職業分類(95年版)』.
- 1995年SSM調査研究会. 1996. 『1995年SSM調査コード・ブック』.
- 付記 新威信スコア作成プログラムについては、ホームページ
<http://www.ir.rikkyo.ac.jp/~murase/>を参照されたい。

www2.rikkyo.ac.jp/~murase/